様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月　 ５ 日現在

機関番号：２７４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2015
課題番号：２４７２０１０２

研究課題名（和文）「写実」理念をめぐる明治中期文学・思想の展開

研究課題名（英文）Development of Realism in Literature and Criticism in the Mid-Meiji Period

研究代表者
木村　洋（Kimura, Hiroshi）

熊本県立大学・文学部・講師

研究者番号：７０６１３１７３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：　私の研究は、明治中期における「写実」理念の形成過程を再検討することを目指した。従来の研究ではとくに坪内逍遙『小説神髄』がこの文脈で重視されてきた。しかし徳富蘇峰、山路愛山をはじめとした民友社同人、キリスト教知識人、ジャーナリストなども「写実」理念の形成に密接に関わっていたと考えられる。本研究は、こうした知識人たちの動向を視野に入れることで、明治中期の文学変革の展開をいっそう十全とした形で浮かび上がらせた。

研究成果の概要（英文）：This research reexamined the development of realism in the mid-Meiji period. It is asserted that Tsubouchi Shoyo's "Shosetsu Shinzui (the Essence of Novels)" was significant in this development process; however, this research emphasizes the necessity of examining other factors to explain this phenomenon. In particular, it considers the contribution of Minyusha Society's members (for example, Tokutomi Soho and Yamaji Aizan), Christian intellectuals, and journalists. This research thus places the above mentioned individuals in perspective and clarifies the history of literature in the mid-Meiji period.

研究分野：日本近代文学

キーワード：坪内逍遙　『小説神髄』　「写実」理念　民友社　徳富蘇峰

１．研究開始当初の背景

これまで私は、近代文学成立期の 1890 年代から自然主義興隆期の 1900 年代後半までの表現と思想の動向を研究してきた。

この過程で民友社の文学史的意義の大きさをあらためて自覚した。従来、徳富蘇峰、山路愛山、宮崎湖処子などの民友社同人の活動は、功利主義的（中野重治・小田切秀雄）という紋切り型の評価のもとで顧みられることが少なかった。私の研究は、そのような理解を修正し、この流れが当時の新興文学の模索を勢いづけた、文学史的に重要な脈絡だったことを明らかにした。

同時に、検討範囲を純文学の外側へと広げることの必要性を理解した。すなわち、史論や貧民窟探訪記事といった、純文学の範疇から逸脱する試み、さらに、明治期の経世家、教育者たちの著作が同時代の文学動向と密接に関与していたことが見えてきた。

こうした検討から浮かび上がるのは、経世家たちの言動や宗教界、教育界から生み出される言葉が決して文学史の余剰の部分ではなく、むしろその重要な部分を構成していたことである。

２．研究の目的

こうした調査の過程で、明治期文学を一貫して主導したとも言える「写実」理念に関する新しい側面が浮かび上がってきた。

「写実」理念に関しては、曲亭馬琴の読本および政治小説の空想性（勧善懲悪）を批判しつつ、「世態人情」の「模写」こそを新たな文学上の指針として設定した坪内逍遙『小説神髄』(1885-1886 年）によって確立され、それが硯友社小説家たちの活躍によって追認されていくというのが今日の一般的な理解である。しかしこれまでの調査によって明瞭となったのは、それが事態の一面でしかないことである。

先述のように徳富蘇峰、山路愛山をはじめとした民友社同人、同時代の宗教家、ジャーナリストたちも当時の文学変革の参画者として大きな役割を担っていた。そして私の見通しでは、明治中期における「写実」理念の確立もこうした者たちとの協同作業として推進されていたと考えられる。ではその具体的な過程とはいかなるものなのか。本研究はこの点を考察する。

そのためには、文学史上における非実作者たちの功績を視野に入れて思想と表現の流れを考察する必要があるだろう。従来の研究では、二葉亭四迷や尾崎紅葉といった実作者に焦点を当てて当時の文学史的状況を把握するのが通例である。しかしこれまでの検討から明確となったのは、必ずしも実作者という範疇には収まらない者たち、つまり、文学について語り、あるいは文学色の強い著作を書いた政論家、ジャーナリスト、史論家、宗教家などの知識人たちが無視できない役割を担っていたことである。

具体的には、徳富蘇峰、山路愛山、植村正久、内村鑑三といった者たちを念頭に置いている。こうした者たちの貢献を視野に入れることで、「写実」理念の形成過程はいっそう明瞭となるはずである。

３．研究の方法

上記のことを明らかにするために検討範囲を、これまで注目してきた 1890 年代に加えて、1880 年代へと広げる必要がある。私の研究は基本的に国会（帝国議会）が開設された 1890 年以降の展開を追跡してきた。しかしそのような視野では不十分である。

例えば徳富蘇峰の言論活動は、すでに 1880 年代半ばから注目されており、また国木田独歩や内田魯庵にも大きな影響を与えたキリスト者の植村正久は、早くも 1880 年代には『真理一斑』（1884 年）などの著作によって言論界に知られていた。このように 1880 年代からの連続性を考慮しながら明治中期の表現と思想の流れを検討する必要がある。

こうした見通しのもと、次のような調査に取り組んだ。

(1) 明治中期の内村鑑三の言論活動

内村の著作、とくに『基督信徒の慰』(1893 年)、「流鼠録」(1894 年)、『地理学考』(1894 年)、『Japan and the Japanese』(1894 年)、『How I Became a Christian』(1895 年）を検討した。

さらに、内村の活動の舞台となったメディア、とくに『国民之友』、『万朝報』、『東京独立雑誌』、『聖書之研究』を調査した。

(2)民友社同人たちの言論活動

山路愛山など民友社同人たちの言説を把握するために、『国民之友』『国民新聞』等の民友社メディア、歴史家・文学者の評伝叢書『十二文豪』（民友社刊）を調査した。

さらに、論壇の有力な発言者だった田口卯吉の発言を把握するために、『史学会雑誌』『東京経済雑誌』などの雑誌を調査した。

(3)徳富蘇峰の時文

『国民之友』『国民新聞』に掲げられた徳富蘇峰の感想録、人物論、文学評論を検討した。また蘇峰とも関連が深い『基督教新聞』『六合雑誌』を調べた。

さらに、蘇峰と対立した政治小説の動向を探るために、末広鉄腸の 1890 年前後の政治小説を検討した。

(4)1880 年代のキリスト教文化圏

植村正久、小崎弘道、徳富蘇峰、宮崎湖処子など、キリスト教知識人たちの著作、『六合雑誌』『東京毎週新報』『日本評論』などのキリスト教メディア、『近代日本キリスト教新聞集成』（マイクロフィルム）を調査した。

４．研究成果

(1) 明治中期の内村鑑三の言論活動

この調査を通して内村の表現活動が明治中期の「写実」理念の形成期において無視できない試みだったことが見えてきた。

例えば内村は、アメリカ流浪時代の自伝的記録「流竄録」について、「余は唯だ余の見し事、聞きし事の有の儘を語り得るのみ、『流竄録』亦た此類なり」（「改版に附する自序」『警世雑著』1900 年）と述べている。現に「流竄録」では、本来ならば秘匿されるような体験や感情が率直に述べられ、米国の「白痴院」の看護人として悪戦苦闘する様を詳述するという、当時としては際立って新奇な試みを行っている。

ここに見られる、「見し事、聞きし事の有の儘」を記述していこうとする意識、そして自己告白への欲求を考慮するとき、内村の試みは、伝統的表現に異を唱えた同時期の小説家たちと協調的な実践として浮かび上がる。内村の著作が国木田独歩や正宗白鳥に強い感化を及ぼしたのもそうした新奇性のためだった。

(2)民友社同人たちの言論活動

この調査によって 1880 年代後半から 1890 年代に書かれた山路愛山をはじめとする民友社同人たちの時文が、当時の「写実」理念と密接に関わっていたことが見えてきた。例えば愛山は、下層の生活者たちを歴史叙述の対象として再定義し（「山東京山」1892 年）、官製史学とは異なる歴史評論を書いていた。それが坪内逍遥『小説神髄』の主張とも通じる実践であることは明らかだろう。

現状ではこうした 1880 年代以降の民友社同人の時文と同時代の文学変革の関係はほとんど検討されていないが、明治中期の「写実」理念の形成は、このあたりの動きと密接に関与した出来事だったと考えられる。

(3)徳富蘇峰の時文

この調査によって、1890 年前後から発表されていく徳富蘇峰の時文がこれまでの馬琴等の読本や政治小説にはない文学観を備えていたことが具体的に見えてきた。

とくに『国民之友』社説記事として書かれた、「インスピレーシヨン」「愛の特質を説て我邦の小説家に望む」「田舎漢」をはじめとする蘇峰の感想録や評論には、英雄豪傑の現実離れした活躍や教条的な儒教的徳目を描き出すにすぎなかった従来の読本や政治小説とは明らかに異質な認識が認められる。こうした蘇峰の時文が当時の文学青年に影響力を持っていたことは、国木田独歩や正宗白鳥の発言からも裏づけられる。

当時の蘇峰の模索は、政治小説とは異なる文学観を明確化していく試みとして、坪内逍遥『小説神髄』以後の文学界の中で喫緊の意義を持っていたと考えられる。

(4)1880 年代のキリスト教文化圏

この調査によって、1880 年代のキリスト教文化圏の動向が、坪内逍遥『小説神髄』の主張とも密接な関連を持っていたことが見えてきた。

植村正久、小崎弘道、徳富蘇峰などのキリスト教知識人たちは、伝統文学に対する優位性を西洋文学に認め、「英雄豪傑」ならぬ無名の生活者や「田舎」「田園」を重要な文学的題材として意識していた。このような英雄豪傑中心主義への懐疑、下層の生活者たちの経験への関心が、「世態人情」という主題の重要性を訴えた坪内逍遥『小説神髄』の主張と補完し合う関係にあることは明らかだろう。この動向は、写実的な表現に意義を見出していく明治中期の文学史の重要な一角を占めていたと考えられる。

さらに、植村の『真理一斑』（1884 年）で熱を帯びた筆致で記される「我」への懐疑は、1900 年代の国木田独歩の文業や藤村操の自殺を予告するものであり、そうした内省的、思弁的傾向においてもキリスト教知識人の著作は先駆的な意義を持っていた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

①木村洋「徳富蘇峰の文学振興」『日本文学』64 巻 6 号、日本文学協会、2015 年 6 月、27-38 頁、査読あり

②木村洋「徳富蘇峰と明治文学」、熊本県立大学編『蘇峰の時代』熊日新書、2013 年 11 月、53-75 頁、査読なし

③木村洋「政治の失墜と自然主義――一九〇八年前後の文壇」『国文論叢』47 号、神戸大学文学部国語国文学会、2013 年 9 月、80-94 頁、査読あり

④木村洋「藤村操、文部省訓令、自然主義」『日本近代文学』88 集、日本近代文学会、2013 年 5 月、1-16 頁、査読あり

〔学会発表〕（計１件）

①木村洋「詩人としての民友子」、シンポジウム「蘇峰の時代――徳富蘇峰と文学の接点」、2013 年 11 月 23 日、於熊本県立大学

〔図書〕（計１件）

①木村洋『文学熱の時代――慷慨から煩悶へ』名古屋大学出版会、2015 年 11 月、全 320 頁

〔その他〕

ホームページ等
http://researchmap.jp/read0142738/

６．研究組織

(1)研究代表者
木村洋（KIMURA Hiroshi）
熊本県立大学文学部准教授
研究者番号：70613173

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし